

## あなたがたは代価を払って買い取られた

使徒パウロは第1コリント7:23で「あなたがたは代価(身代金)を払って買い取られたのだ。人の奴隷となつてはいけない」と言う。これは6:20で彼がすでに述べた言葉を思い起こさせる。「あなたがたは代価を払って買い取られたのだ。それだから、自分の体をもって神の栄光を現しなさい」。キリストの十字架の死という犠牲によって神が私たちのために為してくださった神の「あがないの恵み」を表わす有名な句のひとつである。

ローマ帝国は奴隷制度の上に成り立っていた。奴隷は自由民と違って人格を認められず、その所有者の絶対的権威の下に、その意のままに扱われた。その束縛は厳しかった。しかし、奴隷が大変な努力によって自分に自由を買い取れることを可能にする方法があった。彼は、血と汗を流してかせいだものを神殿に少しずつ預けておく。それがついに自分の自由を買い取る金額となるや主人を神殿に連れて行き祭司を通してその金額を渡す。するとその時、奴隷は象徴的に神の所有となり、主人から自由になる。その人を二度と奴隷にすることはできなかつた。これは当時の社会で行われていたことであつたという。

使徒パウロはこのイメージをキリストとキリスト者に適用する。罪によって無力になっている人間に代わって、キリストは十字架においてご自身の命を贖いの代価として払って下さった。キリスト者は、このキリストの尊い十字架の「あがないの血」によって買い取られ、今や、キリストのもの(所有)とされた。彼は罪から解放された。もはや彼はなにもの奴隷ではない。

人間的にはいかなる身分であれ、人はキリストにあつて罪のくびきから自由にされた。召されたとき奴隷であつた者も自由人も、今や共に、キリストの僕(しもべ)とされ、キリストにあつて真の自由が与えられた。だから、いかなる意味であれ、その心において、その魂において、その霊において、人の奴隷となつてはいけない、と使徒は言う。

割礼・無割礼という宗教的差別も、自由民・奴隷という社会的差別も、このキリストの贖いの恵みにより一つとされた者たちには無意味となる。割礼の有無や自由民・奴隷という身分の差はもはやキリスト者の霊的価値を決定しないのである。別の箇所でもパウロが語る通りである。「あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたはみなキリスト・イエスにあつて一つだからである」(ガラテヤ3:26~28/口語訳)。

この世の全てのものは相対的なものであり、キリスト以外にキリスト者の魂を支配するものはない。それゆえ、相対的なものを恐れる必要はない。割礼の有無も、この世における身分の上下も相対的なものに過ぎない。人はいかなる身分、いかなる状態にあつても、このキリストにあつて自由に生きることができる。だから、今置かれている立場を悲観せず、厭うこともせず、神からの賜物と受け止めてしっかりと足を踏みしめて歩む(生きる)ことをパウロはコリントの信徒たちに勧めるのである。